

工業系大学生のキャリア開発支援に向けた授業方法 ——より実効性のあるプログラム開発に向けて——

Report on the practice of a career development lecture series for engineering students
——Looking for the establishment of more effective program——

栗津敬雄[†], 本間英彦^{††}, 角田伸彦^{†††}
Norio AWAZU, Hidehiko HONMA, Nobuhiko KAKUDA

Abstract This is to report a series of lectures for the 3rd grade students of Aichi Institute of Technology (AIT) in 2014, which is based on the precedent lecture Awazu started for the smaller numbers of students in 2010. The purpose of this series is not to give practical knowledge for job searching but to assist engineering and information science students who will get into real business field in the near future, to obtain their own career perspectives. We tried to let the students to remind what they studied in their previous academic career and to find their own idea how to challenge the engineering theme at their employer in the near future. Throughout the class, we also tried to encourage the students to make their effort for the job with confidence and sincere consideration on their lifelong career development.

1. はじめに

言うまでもなく、大学教育は学術・学芸の教授研究に加え、知的・道徳的・応用的能力を展開させること、そして教育の成果を広く社会に提供することを大きな目的としている。(学校教育法第 83 条、学校教育基本法第 7 条) キャリア教育はまさにその橋渡しを担うものと言える。

わが国の基幹産業を担う中核の人材を育成する使命を帯びた愛知工業大学にとって、①工業系学生のためのキャリア教育であること ②実践的な授業をひとりでも多くの学生に提供すること ③授業を受けたことによって今後のキャリア開発意欲が増し、就職活動に積極的な行動となってあらわれることが重要なポイントである。本論文においてこれらを実現するための授業方法について紹介する。

† 愛知工業大学 キャリアセンター事務部長
同経営学部客員教授 (豊田市)
†† ジャパン・ヒューマン・クリエイティブ代表、
愛知工業大学非常勤講師 (豊田市)
††† J F K・コンサルティング(株)代表取締役、
愛知工業大学非常勤講師 (豊田市)

2. 背景と特色

2・1 社会の要請

2003年4月、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、内閣府による「若者自立・挑戦戦略会議」が発足、これを先がけとして大学だけでなく教育機関、公的機関、業界団体を巻き込んだキャリア開発の議論が活発化、議論を取りまとめる形で「社会人基礎力」が提示されるなど、政策として展開されてきた。

また、2008年のいわゆる「リーマン・ショック」に端を発した景気の落ち込みにより、大学新卒者の求人激減とパイの減少に起因する企業側の求人選考厳選化や、その結果としての就職率低下が顕著となった。そしてそれを背景に、より質の高い人材を求める企業側の要請と学生や保護者の不安から、より実践的な就業力を高める教育の必要性が高まってきた。

図1は全国の大学等新卒者求人数と就職率の推移を示す。なお、本文中「就職率」とは就職希望者のうち、就職した者の比率を言う。従来、愛知工業大学ではこれを内定率と呼んでいたが、2013年12月16日付文部科学省通知により明確化された定義に従う。

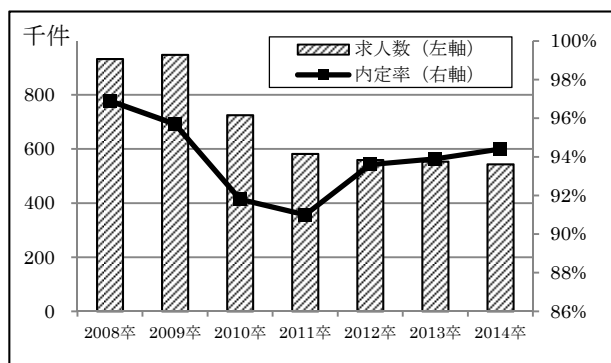


図1 求人/内定率推移 (厚生労働省 平成 25 年度大学等卒業生の就職状況調査、リクルートワークス研究所 大卒求人倍率調査より)

2・2 愛知工業大学の就業力育成プログラム

愛知工業大学では、地域の産業社会に中核的な人材を送り出している工業系大学として、こうした社会的要請に的確にこたえていくための就業力育成プログラムをより充実する必要があるという議論がなされてきた。2012年、学長の指示を受け、キャリアセンター長を座長とする愛知工業大学就業力育成プログラムが発足、愛知工業大学が育成に取り組むべき就業力の内容を次のように定義した。すなわち、①社会のニーズに公正かつ誠実に対応する意志と能力を有すること、②主体的に学び、考え、行動できること、の2点である。こうして明確化した定義のもとに従来から行っていた諸活動の集約・整理が行われた。(平成 25 年度愛知工業大学自己点検報告書 p31-32)

2・3 情報科学部「キャリアデザインⅡ」の開始経緯

筆者(栗津)は就職活動支援の現場で、学生の自己PR・志望動機が型にはまった表現が多く、工学部の学生でありながら専門分野の学修内容に全く触れない学生がいるなど、マニュアル化した就職支援の弊害を感じていた。また企業の現場では、会社で何をやるのかイメージがつかめないまま入社して、ミスマッチや意欲喪失でキャリア形成に失敗する若者を少なからず見てきた。

愛知工業大学の情報科学部において 2010 年度から実施したキャリアデザインⅡの授業では、栗津が実務者として有していた上記の問題意識からスタートし、学生がそれまでに学んできた専門知識を中心に置いた自己PR、QCD とは何かをはじめとして企業の課題を想像させ、その課題に挑戦する意志表示としての志望動機を考えさせることに重点を置き、4 年間にわたって試行錯誤を重ねながら授業を実施した。その成果を検証することは困難だが、結果としては既存学部と遜色のない就職率を記録することになった。

図2は学部別の就職率推移を示す。

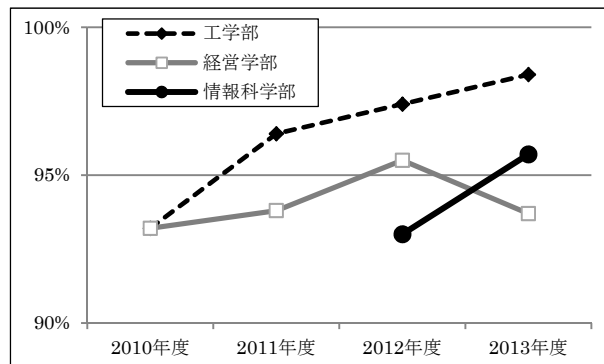


図2 学部別就職率 (愛知工業大学キャリアセンター資料による)

2・4 本授業の対象拡大

以上のような背景から、情報科学部3年次の「キャリアデザインⅡ」が社会的な要請に対応するとともに、製造業を中心とした地域の産業社会の課題にチャレンジできる人材の育成に有効な授業であると考え、工学部電気学科および応用化学科にも対象を広げて実施することとなった(工学部における授業名称は「キャリア意識形成」)。

3. 本授業の内容と方法

3・1 授業の概要

2014年度は情報科学部情報科学科、工学部電気学科および応用化学科の3年生を対象に前期の選択科目として実施した。単位数は2単位である。教員はいずれも企業の人事部門や社員教育の経験を有する非常勤講師3名で担当し、シラバスとテキスト(パワーポイントによる講義資料)の基本部分を共通とする形で実施した。履修登録確定時の受講人数の合計は523名、在籍者に対する受講率は74.1%であった。表1に専攻別の内訳を示す。

なお、受講者が多数となることが予想された情報科学部の2専攻は2クラス制とした。なお、授業の出席率は92.8%、最終合格者数は506名で合格率は96.7%であった。成績評価はレポートの内容と模擬面接時の発言内容、発表態度等を教員が個別に判定、出席率を加味して総合的に判定した。選択科目のとしては高い受講割合を示した。

専攻	電気	電子情報	応用化学	バイオ環境	コンピュータシステム	メディア情報
在籍者	148人	133人	88人	84人	150人	103人
登録者	53人	103人	79人	76人	125人	87人
受講率	35.8%	77.4%	89.8%	90.5%	83.3%	84.5%

表1 受講登録状況

3・2 授業の目的とねらい

本授業は工業系学生に強く求められる専門分野の学修成果を中心とする能力の自覚と、その能力を企業の技術的な課題解決・目標達成に役立てる意志を自覚させることを目的とした。そうした自覚を就職活動における自己のキャリア開発ストーリーの中核（図3に示したとおり、「キャリアステートメント」と称した）に据えることによって、自信をもって就職活動に臨む準備を整えるとともに、自分の能力が発揮できる分野の広がりを理解することによって、キャリア開発の選択肢を広げることをねらいとした。

このストーリーは企業の課題を研究するところに最大の困難があるように見える。しかし、専門性の高い分野で学んでいる工業系学生にとって、ストーリーの整理さえできれば、企業の技術上の課題を推測することは必ずしも難しいことではない。「キャリアステートメント」は、そのためのヒントとして学生に提示したものである。

例えば企業パンフレットやHP上にある製品の写真を見て、その製品の製法や工程を推測したり、製造上・品質管理上の課題を考えたりすることは、日々の学習の延長線上にあることが多い。そのことに気付けば、志望動機の文脈の中で、企業の技術者として製品の改善や品質の向上に携わることの意味や取り組み意欲を表現することに結びつけやすい。

キャリアステートメント

私は〇〇ができます。

私の〇〇の能力を生かし、御社の□□に挑戦し、御社の△△に貢献したい。

※ 〇〇：能力 □□：課題 △△：企業の目的

図3 キャリアステートメント

以下に、シラバスで学生に提示した授業のねらいをより詳しく記述する。

3・2・1 自己分析のポイント

工業系の学生がメーカーなどモノづくりに関連する企業に就職しようとする場合、選考過程において、大学で学んできた専門分野の知識・経験は多かれ少なかれ要求される。しかしながら、一般的な就活ノウハウが浸透した結果、自己分析の結果としては専門知識よりもコミュニケーションやチームワークなどの人間関係能力がもたら求められる、という予断をもって就職活動に入る学生が多い。そうした人間関係能力が劣っているという自己評価をしている学生にとって、長い時間をかけて学んできた専門的な知識を改めて思い起させ、自己肯定力

を高めつつ、それを中心に自己PRを組み立てさせることによって、就職活動に自信を持って取り組むことができる考えた。

3・2・2 社会から求められる使命の理解

工業系の学生が社会から期待されていることは、社会とそれを構成するひとり一人への『人に役立つハードおよびソフトを創造し、提供していくこと』である。それは多くは企業活動を通して行われる。したがって、志望する企業の経営課題や技術課題を研究することは、自らの技術者としてのキャリアを考える上でも、有意義なことであるし、企業経営者も応募者がどこまでその使命を理解しているかを確かめるために「志望動機」を聞くのである。

しかし一方で、またそれ故に就職活動の支援を行う上で、「志望動機」をどう組み立てていくかは指導が難しい。それは、学生が志望する企業を特定できていなかったり、仕事の内容を理解していなかったりすることが大きな要因だが、最大の要因は「なぜこの会社を受けるか」という「理由」をうまく説明できないことにある。

本授業では「志望動機＝志望理由」という短絡的な理解ではなく、志望動機はむしろ、「これから入社する企業で働く意志を示すこと」であると考えてストーリーを作り、それに沿って自己PRと志望動機を一貫させることを目指した。元来、企業の技術系社員にとって「働く」ことの主たる部分はその企業の技術課題の解決や達成に他ならない。また、工業系学生にとってこうした文脈で自分のキャリアを考えることは「学びの結果を生かす」ことであり、論理的に理解しやすい。本授業ではこの文脈で、近い将来自ら取り組むことになる「企業の課題」は何かということ、企業HPを題材に考えさせる。

3・2・3 選択肢の拡大

社会から求められることが何かを理解した上で、学生自身が自らのキャリアイメージを自覚しながら主体的に、自信をもって職業選択を行い、就職試験という関門に立ち向かうことが本授業の最終的なねらいとなる。

社会的な使命にチャレンジするには、まずは学修成果を活用するという意識が必要だが、大学で学んだことは企業の技術課題を理解する手助けにはなるものの、多くは入口にすぎず、技術課題の解決や成果の達成にはさらに研鑽と経験を積みなければならない。また、専門分野の知識や経験を生かす職業選択とは自己の専門分野を業としている企業を直接的に目指すだけではなく、間接的に生かすことも含めて多様な活用の仕方がある。企業研究を深めることによって、専門分野外の企業であっても

自分が勉強した知識を生かせる職があること、職種を越えた共通の技術課題も存在することに気づけば、キャリア初期における選択肢も拡大できることになる。

こうした気づきを促し、納得できるキャリアプランを作れるよう、企業研究に重きを置いた授業構成とした。

3・3 授業の進め方

図 4 に授業の進め方の全体像を示す。

上記のようなねらいを達成するために、3名の教員が共通のシラバスで共通テキスト（企業研究部分を除く）を用いることにより日程を同期させ、必要に応じて合同授業を行うこともできるようにした。また、社会を構成する「仲間」や「相手」の視点を理解することによって、単に知識としてではなく自ら主体的に考え、行動できるよう、授業そのものをキャリア開発行動のシミュレーションとして位置づけ、グループ討議を多用するなど、授業の進め方を工夫した。

さらに、仕上げとして求人企業の経営者を招いた特別講義、および一部のクラスでは求人企業の見学会を企画、授業内容のフォローを行うとともに実際の産業社会における自らの活躍場面を体感的に理解させることを試みた。

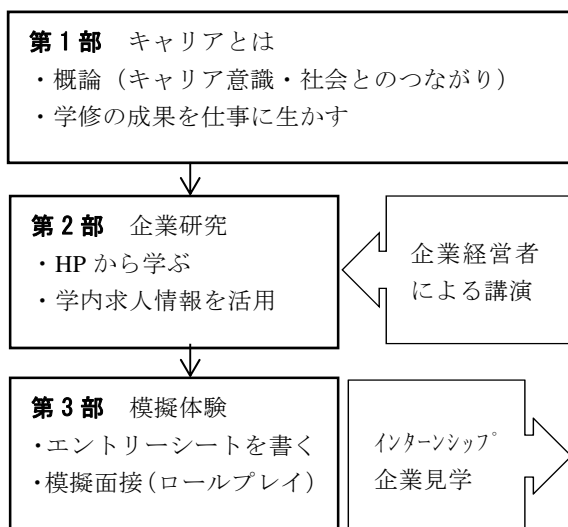


図 4 授業の進め方

以下に、テキストと具体的な実践手法の例を記述する。授業の性格上、書籍の形態でのテキスト作成は不向きと考へ、栗津が従来使用していたものをベースにパワーポイント資料を作成し、その約 8 割を各クラス共通で使用した。非共通部分は主として企業 HP の抜粋を企業研究の題材とした部分である。

3・3・1 テキスト（パワーポイント資料）の例

図 5 は共通テキストとして用いた資料の一部である。

キャリアデザインⅠ
キャリア意識形成-1

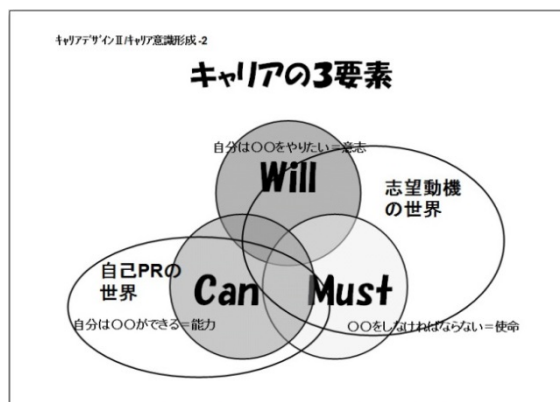
日程表(火曜日) KX CC CB

日程	内容	日程	内容
4月8日	①第一部 キャリアデザインとは 人生を俯瞰し、自分の位置を確認	6月10日	④スペシャルコンテンツ1 特別講義 企業経営者に聞く
4月15日	②Will, Can, Must 意志、能力、使命の自覚とは	6月17日	④エントリーシートの企業作成 具体的な志望企業を意識しながら
4月22日	③進路研究 自己分析とキャリアステートメント	6月24日	④第三部 活動のイメージについて エントリーシートを仕上げ
4月29日	④第二部 企業研究について 職種、会社の組織、働き方	7月1日	④スペシャルコンテンツ2 未定
5月13日	⑤企業HPで企業研究 事業内容と課題、スタッフの使命	7月8日	④模擬面接試験 セッション1
5月20日	⑥企業HPで企業研究 自己分析の結果→企業研究へ	7月15日	④模擬面接試験 セッション2
5月27日	⑦企業HPで企業研究 具体的な企業研究	7月22日	④全体のまとめ 社会人になる！
6月3日	⑧J-Netで企業研究 具体的な企業研究	7月29日	試験日 (試験は実施しない)

キャリアデザインⅠ
キャリア意識形成-1

この授業の構成(予定)

テーマ	内容
1~3	キャリアデザインとは 人生におけるキャリアデザインの意味と、目前に迫った就職という大きな節目にどう向き合うか
4~9	社会から求められるもの 大学での勉学の成果を生かして、産業社会に戦力として参画するために必要な、社会から求められる使命とは何か
10~15	社会に参画する力を磨く 実際の就職活動をイメージしながら、社会人としてキャリアを踏み出していくための自覚と自信を持てるように自分を高めていく



キャリアデザインⅠ
キャリア意識形成-2

学業で自己PR→これまでの全キャリアを生かす

私は〇〇ができます...ということは

- ・小学校くらいの頃からずっと(理系的な)興味・関心、価値観、数学・物理・化学、工学・情報科学基礎を学んできた

これらの全体を生かすこと

- ・数学や物理・化学が面白い
- ・モノやPCをいじるのが得意
- ・工作や実験が好き

7つの専門能力
専門分野の基礎
理系の基礎学力
人間的な判断・価値観
興味・関心

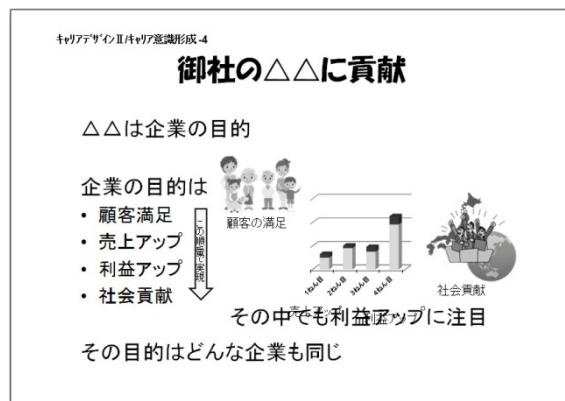
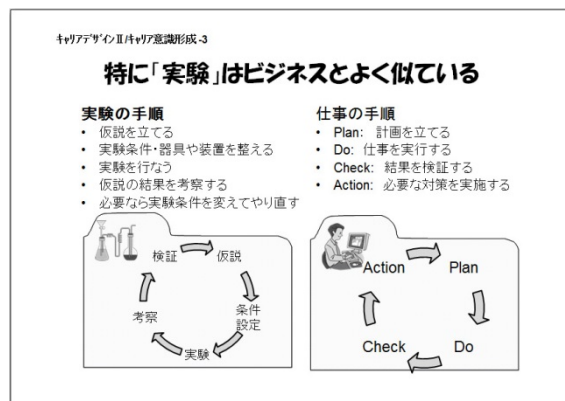
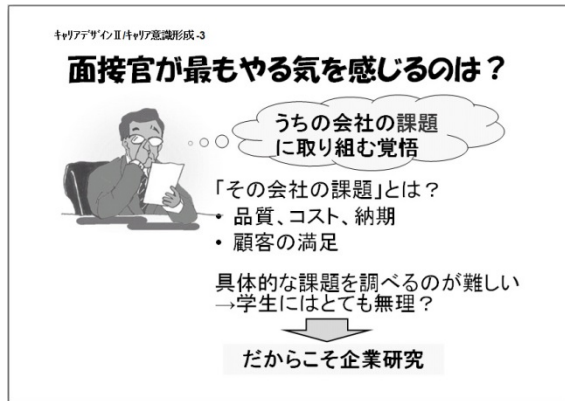
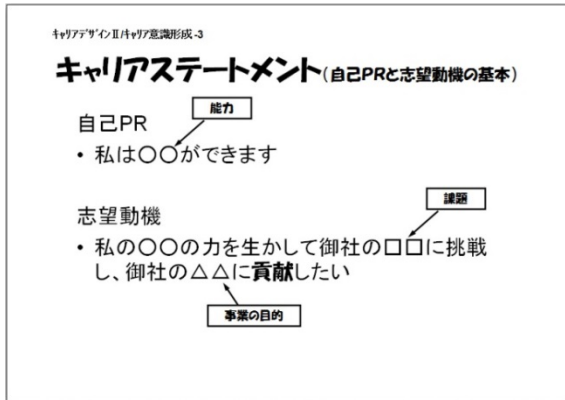


図5 パワーポイント資料の抜粋

3・3・2 企業研究のアプローチ

企業研究は、学生にとって①主体的に課題に取り組む訓練ができていない ②ビジネスの課題を論理的に学んだことがない ③ビジネスの現場と自分が経験したアルバイト等の現場との乖離感が大きい などの理由から取り組みの難度が高い。これに対して、QCDの改善による顧客満足の達成など、どの企業にも共通する基本的な取り組みを説明するとともに、企業HP上の「先輩の声」に注目させたり、仕事の課題をバーチャルに実感させたりするなど、近い将来の自分の問題として考える機会を設けた。

企業研究の題材としては、専攻ごとに業種やOB・OGの入社実績を参考にして、約50社を抽出、そのうち複数専攻で共通して使用した企業を含めて、グループ討議の題材として各専攻で8社、仮志望企業候補(後述)として各専攻7~10社のうち1社を題材とした。その結果、学生一人当たりの対象企業数は最低9社となった。企業研究は主にHP画面閲覧の他、適宜4年生向けに公開されている学内のWeb求人情報も参照した。

3・3・3 グループワーク

第1回目の簡単な自己紹介に始まって、毎回必ずグループで話し合う時間を持つようにした。特に、学生にとって難度の高い企業の技術課題研究は、一方的な説明や個人で考えるよりも仲間どうして「気づき」を共有することで理解が深まる。企業HPから最大限の情報を読み取れるよう、教員からのガイドを加えながら時間をかけて進めていった。終盤には就職活動のシミュレーションのための「仮志望企業」を決め、同じ企業を目指す仲間という設定でグループを形成し、企業研究を行わせた。

3・3・4 模擬面接

図6は、授業の第3部の中核をなす模擬面接の進め方を示したものである。

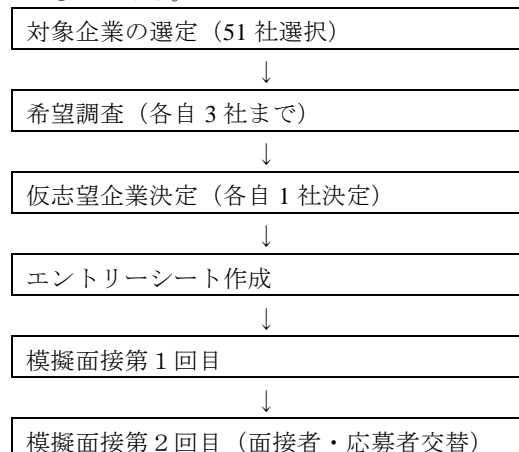


図6 模擬面接の進め方

授業の第 10 回と第 11 回では、仮志望企業への「エントリーシート」を書くという作業を通じて、それまでの授業で形成してきた将来のキャリアイメージを、応募者の立場で言葉にして表現することを目指した。これが模擬面接試験の準備段階でもあり、実際の就職試験をシミュレートすることにもなる。エントリーシートは自己 PR と志望動機から成るシンプルなものとし、表現の細部よりもキャリアステートメントに沿って自分のキャリアイメージの大筋を押さえたストーリーづくりを指導した。

第 13 回と第 14 回では、模擬面接試験として、面接者と応募者の役割を交替してロールプレイを行った。特に面接者の立場で相手のプレゼンテーションを合否判定する心構えで聞くことにより、実際の面接試験に取り組む自信と自覚を持たせることをねらいとした。具体的な方法は、同じ企業を目指すグループを赤チームと黒チームに分け、第 13 回は赤チームが面接官役、黒チームが応募者役、第 14 回は役割を交代するという要領で、全員が応募者・面接者の役割でのロールプレイとした。赤チーム 3 名、黒チーム 3 名の組み合わせにするとロールプレイが最も効率的に運営できるため、1 グループができるだけ 6 名になるよう編成を調整した。

結果的には受講人数と時間数の制約から、1 人あたりの自己 PR・志望動機発表時間が約 2～5 分程度となり、面接練習としては全く不十分ではあるが、臨場感と相手の立場で対象者に接する体験としては所期の目的を達したものと考えられる。

3・3・5 教員のかかわり方

シラバスは共通としたものの、授業の進め方の細部は各教員の判断で進めることとした。3 名がほぼ共通して心がけたのは以下のような事項である。①教壇から一方的に話すのではなく、学生との距離を縮めるために教室を歩き回ってできるだけ中に入る ②参加意識を高めるための声かけと理解不足部分のフォローアップ ③授業の進行プロセス全体がトレーニングであり、就職活動のシミュレーションでもあるように説明 ④キーワードを反復して理解を深める。(例: CS、QCD、人生全体) ⑤教員自身の体験を踏まえた話題提供(例: エンジニアの楽しさ) ⑥キャリアセンターの活動を紹介、キャリアセンターの協力を得てオフィスの見学も行って、実際の就活時に気軽に利用できるようにした。

3・3・6 企業とのコラボレーション

授業の第 12 回は、専攻ごとに企業を選定して企業経営者(社長または役員)を招聘し、入社後に取り組むべき技術課題や若手社員への期待などを中心に質疑応答を

含め 80 分間の授業を実施した。企業の選定基準は①各専攻の専門分野が生かせる業種(学生が通常「本命」と考えないものも含む)。②愛知工業大学の OB・OG が在籍するまたは、同大学から学生を採用する意欲のある企業。

また、一部の専攻でかつ希望者のみだが、夏季休暇を利用して企業訪問(見学会)の機会を設け、のべ 20 名の学生が 4 社を訪問した。

4. 本年度の実施結果

4・1 アンケート調査(全員対象)

授業の中間時および最終時に受講者全員を対象として 2 度にわたり無記名でのアンケートを実施した。またどちらのアンケートの質問も同一の内容とした。

本授業は対象学科拡大第 1 期目であるため、受講生が授業をどのように受け止め、就職活動やその後のキャリアプランを考えるうえで役に立つものとなったかどうかを主たる観点とした。従って個別質問ごとではなく観点において質問の回答を分析する手法を採った。次年度以降の授業の改善につなげることをねらいとした。

質問では授業を受けた理由、期待からはじめ就職活動への有用性や受講前後の自己イメージの変化など複数回答を要求するものを含め全 8 項目を設定した。

4・1・1 観点 1 本授業に対する受講動機と期待度はどうか。

質問 1 では、受講理由を尋ねた。図 7 にその結果を示す。一番多かったのは就職活動に役立てたいという積極的な動機であった。一方、単位を取りやすい、周囲が受講するからなどの受動的な動機は低いレベルであった。

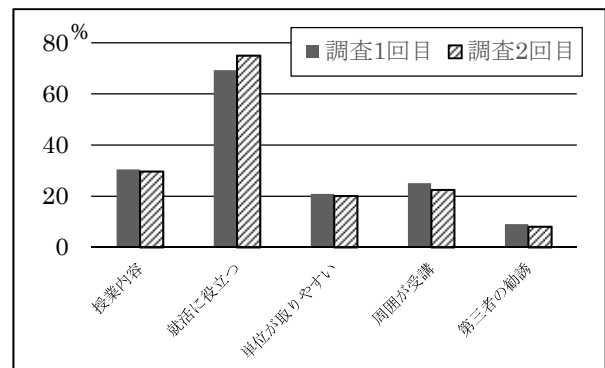


図 7 受講動機(複数回答)

質問 2 では、授業への期待値そのものを尋ねた。図 8 にその結果を示す。

この質問に対しては、キャリアデザインに役立てたいという期待とエントリーシートの書き方や面接試験への

対応というテクニカルな就活対策を期待している様子も見受けられた。

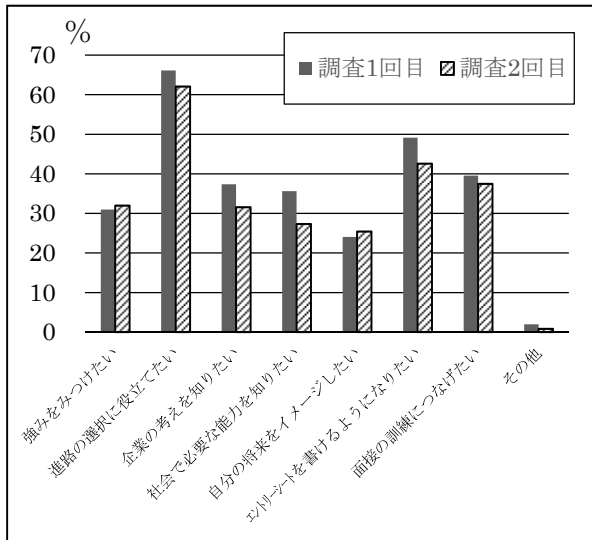


図8 授業に期待すること (複数回答)

4・1・2 観点2 今の自分に自信が持てたか

質問6は授業受講前と調査時点での就職についての自己イメージを尋ねている。それぞれ10点満点で自己評価してもらった。図9にその結果を示す。

受講前の自己評価が低い者ほど受講後の自己評価が高くなる傾向が認められる。最も人数の多い低位群(受講前の自己イメージが低かった者)が2.79から5.81にアップしていた。これは就職に対する自信が持てなかった層が受講によって自信が持てるようになり、自己のキャリアをより前向きにとらえるようになったと考えられる。また、人数で見ると約51%(214名)の学生が、『大きく変化した』と答えており、授業の影響の大きさを表していると思われる。

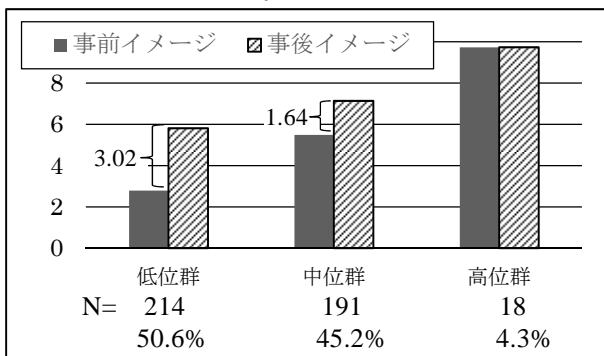


図9 受講前と受講後の自己イメージ得点の平均 (自己イメージを10点満点で回答。受講前の自己イメージ1~4を低位群、5~7を中位群、8以上を高位群として集計)

また、質問4では、本授業以外に受けてみたい授業を尋ねている。図10にその結果を示す。

この質問では1回目の調査よりも2回目の方がプレゼンテーションに関する授業を受けたいとする数値が高くなっている。これは、2回目の調査の前週・前々週に実施した「模擬面接」の結果、プレゼンテーション能力の不足を強く認識したものと推察され、今の自分に対する自信とまでは言えないまでも、来るべき就職活動に積極的に取り組む気持ちの表れと受け止めたい。

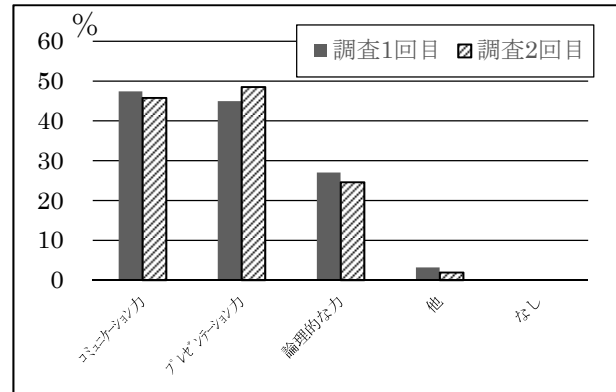


図10 本授業以外に受けたい授業 (複数回答)

4・1・3 観点3 社会をより深く理解し、選択肢を広げる心づもりができたか

質問6の自己評価について、受講前の平均値が4.21、受講後は6.54であった。また、母集団標準偏差は受講前が1.87、受講後は1.63であった。本授業の受講によって、受講者全体をみた場合、進路に関する具体的なイメージをつかめてきた者が増えてきて、自己肯定のレベルも高くなったと考えられる。

質問7では、現在考えている進路を具体的に尋ねている。図11にその結果を示す。

これによると、進路希望のパターン自体は1回目と2回目で大きな変化は見られないが、企業または進学などはっきりとした進路を見通せる者が増えた。企業が多多いのは従来の愛知工業大学の進路傾向と同じである。

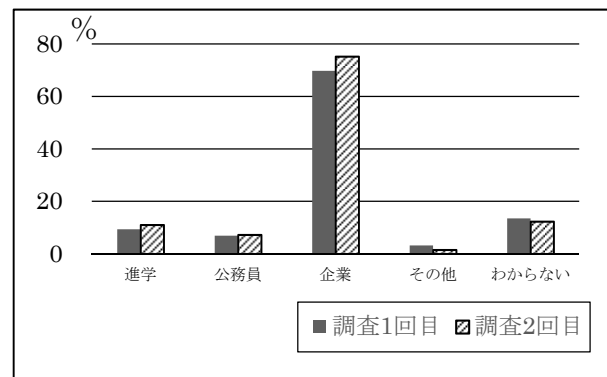


図11 現在考えている進路 (複数回答)

4・1・4 観点4 実際の就職活動に取り組む自信が持てそうか

質問3では本授業がどの程度就職活動に役立ったかを5点満点で尋ねている。その平均値は第2回目の調査で4.18である。

模擬面接について、第2回目アンケートで、模擬面接が役に立ったかどうか回答してもらった結果を図12に示す。この結果の平均値は4.13であり、授業全体と比べて大きな差はない。面接に至る準備も含めてのシミュレーションが役立ったのではないと思われる。

また、質問6による自己評価向上の差の絶対値は2回目の調査で2.33(4.21→6.54)であり、この数値も本授業が就職活動に向けて自信を得たことの表れであると思われる。

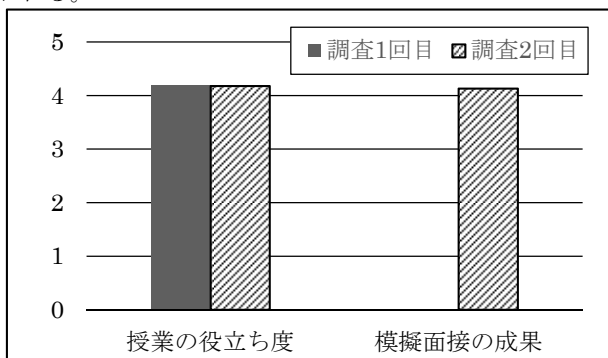


図12 授業の役立ち度 (5段階評価) の平均得点

4・1・5 観点5 上記各事項について、専攻別の違いがあるか

質問6の自己評価について専攻別に見たものを図13に示す。これによると、電気とコンピュータシステムが2回目でやや評価が低下しているが、全体に見ると大きな差異はなく、全体の評価を向上させている。したがって、授業の内容は汎用性があると考えられる。

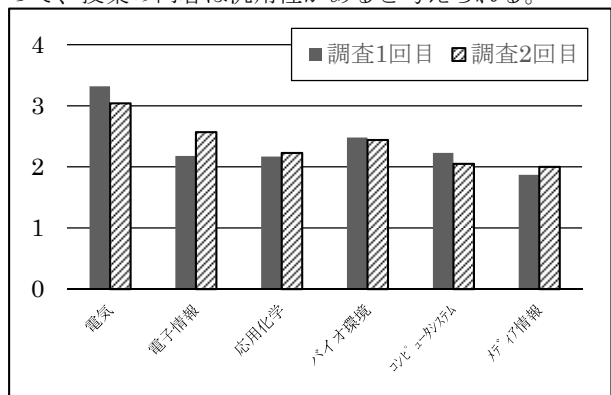


図13 自己評価向上 (5段階評価 専攻別)

また、図14に質問7の「現在考えている進路」を専攻別に示す。ここにも大きな差異は見られないが、バイオ環境化学専攻の学生で進学を選択した者が第1回目の

調査結果よりも増加し、6つの専攻の中で最も高くなっているのが特筆される。

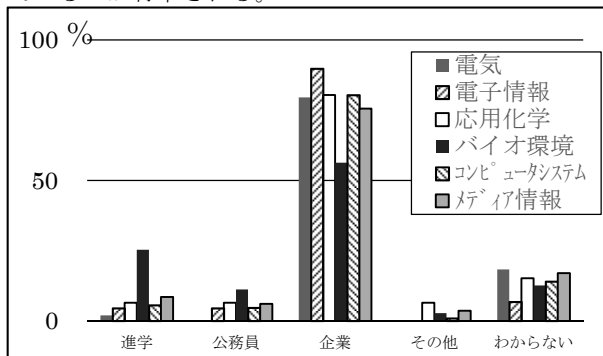


図14 現在考えている進路 (2回目調査専攻別)

4・2 ヒヤリング調査 (任意対象)

授業終了後約1か月の時点でキャリアセンターを訪れた5名の学生にヒヤリングを行った。アンケートと同様、授業の成果を裏付ける意見が多かったが、キャリアの考え方よりも就職活動に備えての実践的なテクニック面に期待する意見が多かった。

<p>受講の動機について</p> <p>就職を意識し始めていたので役にたつかなと思った 少しでも早い時期に情報がほしい 就活についての知識がほしい 就職活動の実際はどうかイメージを持ちたかった 就活に向けての準備として受けてみようと思った</p>
<p>印象に残った点、良かった点</p> <p>企業の経営者の話が直接聞けてよかった 全体を通じてどう就活準備すればよいかわかった 企業のホームページの見方がわかった 志望動機、自己PRは書いてみて難しさがわかった 面接演習は実際的でよかった 面接演習の準備の段階で自分を見直すことができた 体験的な授業がよかった</p>
<p>難しいと感じた点</p> <p>志望動機や自己PRの書き方 面接演習 企業課題のところまで入っていけなかった グループワークの時の他人とのコミュニケーション</p>
<p>授業への要望と期待</p> <p>指摘箇所を修正したい。面接演習を2回やりたい グループディスカッションをもっとやりたい 面接演習で予定しない質問をする機会がほしい やり方がわかれば自習できるので企業研究は減らしてほしい コミュニケーションについてやってほしい</p>

表3 ヒヤリング調査の実施結果

5. 今後の課題と方向性

5・1 学科別、専攻別の内容検討（共通部分と固有部分）

準備期間の制約もあり、テキストや進め方の共通部分が多く、学科別・専攻別の固有部分は企業研究の題材企業の選定にとどまった。実際は情報科学部と工学部では専門分野の履修内容だけでなく学生の気質や就職先の業種による人材ニーズの違いも多いと考えられるため、自己分析部分についても共通部分と固有部分の切り分けを検討する必要がある。

5・2 クラス構成、教室など

グループ討議とロールプレイを活発に行うためには受講者数は最大 50 名前後が望ましい。今回、最大のクラスは 100 名を越え、模擬面接やグループ討議の指導に充分なゆとりはなかった。また、教室は机と椅子が固定式であるため、グループ討議がやりにくく、課題を残した。

また、工学部にはパソコンの配布がないため、専攻によって個人のパソコンの有無や授業時間内に活用できる台数にばらつきが発生し、企業研究の際に授業の進行にやや差が出た。

5・3 担当教員について

本授業は栗津が過去 4 年間にわたって実践してきたものを基本にしている。栗津以外の 2 名はこの実践結果に賛同し、共通シラバスで実施することに同意して今回の拡大実施に参画したものである。

本授業は企業で取り組むべき技術課題を研究させることに重点を置いているため、教員自身の企業経験は極めて重要である。一方、学生の進路希望が多様であるため、研究対象の業種は幅広いものになる。教員は幅広い業種・業界の技術課題について、できるだけ深い知見を有しているのが望ましい。

今回、本授業を担当した 3 名は、それぞれ企業経験と大学での授業経験を有しているものの、経験外の分野の企業研究を指導する困難は少なくない。これを補うため、2 社ずつ事前の企業訪問を行い、現場での技術課題の確認や若手社員の働き方などについて取材を行ったが必ずしも充分とは言いがたい。今後、本授業を継続していくためには、機会を捉えた研鑽をもっと積む必要がある。

5・4 キャリアセンターの就職支援諸施策との役割区分

授業の役割はキャリアの考え方と個人のキャリアデザインの方向性を学生一人ひとりに考えさせることであり、キャリアセンターの役割はキャリアプランを実現さ

せるためのノウハウを含めた実戦的な支援である。これらは個々の学生にとっては、必要とする指導や支援の程度も異なるうえ、単に知識として理解すればよいという性格のものではない。

したがって、両者の役割を過度に区分するのは問題ではあるが、相互の関係者にとって課題や限界を含めた相互の役割の明確化、共通理解、連携体制を持つことが必要である。具体的には以下のような事項が対象となろう。
①企業情報のアップデート（授業の材料として、実際の就職活動の対象として） ②学生の個人ニーズの把握と共有（キャリアデザインの段階からハウツウの段階への橋渡しのため） ③相互補完的な情報共有の仕組みと人材確保を含めた組織としての最適なあり方の検討

6. おわりに

本授業が目指した、工業系学生の特質を踏まえたキャリア教育実践の成果を上げるため、テキストや授業内容だけでなく、企業研究の対象の選定や模擬面接の運営など、多くの工夫を重ねてきた。その結果として工業系の学生の特性を踏まえつつ、500 名を越える学生に実践的なキャリア教育を行うことが可能になったと考える。

受講した学生のフォローを組織的に行うことは現時点では不可能であるが、学生たちが授業の成果を積極的に受け止めたことにより、良好な出席率を保ったのみならず、授業終了後の就職活動への取り組みにも生かされているという印象を受けている。これらの点から見ても、受講生が各自のキャリアを切り開いていく意欲を持たせる上で、目指した方向性に齟齬はなかったと評価できよう。

謝辞

本授業の実施にあたって、この授業機会を与えていただいた愛知工業大学基礎教育センター、工学部、情報科学部の教員各位に感謝の意を表したい。加えて、愛知工業大学の求人企業、関係企業団体、キャリアセンター職員各位の協力があつたことも付記して謝意を表したい。

参考文献

- 1) リクルートワークス研究所 大卒求人倍率調査
- 2) 愛知工業大学自己点検報告書 平成 25 年度
- 3) 栗津敬雄 工業系学生のための就活ガイダンス 丸善 2014
- 4) 望月厚志 角田伸彦 大学における「学生のための自己啓発セミナー」の授業実践——「先取り OJT」講座を中心に—— 茨城大学大学教育センター編『大学教育

センター紀要第 2 号』 2012

5) 望月厚志 角田伸彦 大学における「学生のための自己啓発セミナー」の授業実践[Ⅱ]——「キャリア開発セミナー」および「キャリアガイダンス」の授業実践—— 茨城大学大学教育センター編『大学教育センター紀要第 3 号』 2013

(受理 平成 27 年 3 月 19 日)